

第3回 雪明・新潟眼科フォーラム

(日本眼科学会専門医制度生涯教育認定事業No.25182)

Yukiakari・Niigata Ophthalmology Forum

日時:平成28年2月21日(日) 9:00~15:00

場所:「朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター」2階

スノーホール

〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号 TEL:025-246-8400

専門医単位:3単位

会費:医師:3,000円

レジデント・視能訓練士:1,000円

※視能訓練士の方は、事務局へ事前登録をお願いいたします。

※託児室を設置します。ご希望の方は事前予約が必要です。事務局へお問い合わせ下さい。

プログラム

Program

9:00~ 開会の挨拶 新潟大学大学院医歯学総合研究科視覚病態学分野 教授 福地 健郎先生

【第一部】 座長:新潟大学医歯学総合病院眼科 講師 松田 英伸先生

9:05~9:50 <<1>神経眼科・小児眼科>>

『先天赤緑色覚異常の基礎と臨床』

滋賀医科大学眼科学講座 講師 村木 早苗先生

9:50~10:35 <<2>角膜・屈折矯正手術>>

『次世代の屈折矯正手術 SMILE・Hole ICL』

北里大学医学部眼科学教室 准教授 神谷 和孝先生

10:35~10:45 (休憩)

座長:新潟大学大学院医歯学総合研究科視覚病態学分野 教授 福地 健郎先生

10:45~11:30 <<3>緑内障>>

『視神経症としてのOCTを用いた緑内障診断』

神戸大学大学院医学研究科外科系講座眼科学分野 講師 金森 章泰先生

11:30~12:15 <<4>ぶどう膜>>

『注意すべき炎症性眼疾患』

横浜市立大学大学院医学研究科視覚器病態学 主任教授 水木 信久先生

12:15~13:30 (昼食休憩) ※会場にて昼食をご用意いたしております。

【第二部】 座長:新潟大学医歯学総合病院眼科 講師 長谷部 日先生

13:30~14:15 <<5>疫学>>

『眼科疾患の疫学、そして、これからの眼科予防医学』

山形大学大学院医学系研究科公衆衛生学講座 准教授 川崎 良先生

14:15~15:00 <<6>網膜硝子体>>

『加齢黄斑変性に関する新知見と治療への展開』

東京女子医科大学眼科学教室 准講師 古泉 英貴先生

15:00~ 閉会の挨拶 新潟大学医歯学総合病院眼科 講師 松田 英伸先生

【共催】雪明・新潟眼科フォーラム / 参天製薬株式会社 【後援】新潟県眼科医会 / 新潟市眼科医会

第3回 Yukiakari・Niigata Ophthalmology Forum

雪明・新潟眼科フォーラム

日本眼科学会専門医制度生涯教育認定事業 No.25182



開催日時

平成28年 2月21日(日) 9:00~15:00

開催場所

「朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター」2階 スノーホール

〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号 TEL:025-246-8400

事務局

新潟大学大学院医歯学総合研究科 視覚病態学分野 事務局内

雪明・新潟眼科フォーラム事務局 TEL:025-227-2296 FAX:025-227-0785

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757

【共催】雪明・新潟眼科フォーラム / 参天製薬株式会社 【後援】新潟県眼科医会 / 新潟市眼科医会

第3回 雪明・新潟眼科フォーラム



ごあいさつ

新潟大学大学院医歯学総合研究科視覚病態学分野 教授

福地 健郎



謹啓

歳晩明冷、先生方におかれましては、いよいよ御清祥のこととお慶び申し上げます。

眼科は「眼」に関する総合的な診療科であるはずですが、現実的には専門分化がより進んでいる科でもあります。すべての領域のアップデートの知見をすべて把握することは困難で、その機会もなかなかありません。大学という立場で診療に当たっている私たちにとっては、各領域の綿密で有機的な連携というのも重要な課題です。また、地域の先生方と最新の知識を共有することは、病診連携、診々連携という意味でも重要なことではないかと思えます。そのような現在の眼科を取り巻く環境を踏まえて、2014年2月に始めました雪明・新潟眼科フォーラムも、今回で三回目を数えることになりました。

今回も各領域の第一線で活躍されている先生方をお招きすることができました。今回は昨年、一昨年と比べますと、やや若手の先生方にお集まりいただく形になりました。これは返せば各領域の最前線で活躍中の先生方ということになります。より具体的に、より実際に即したお話がお聞きできることを期待しております。

皆様、ご多忙とは存じますが、是非とも出席賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

謹白

先天赤緑色覚異常の基礎と臨床

滋賀医科大学眼科学講座 講師 村木 早苗 先生



略歴

| | | | |
|-------|----------------------------|-------|---------------|
| 1993年 | 大阪医科大学医学部卒業 滋賀医科大学眼科 医員 | 1998年 | 滋賀医科大学眼科 医員 |
| 1994年 | 済生会滋賀県病院眼科 医員 | 2000年 | 滋賀医科大学眼科 助手 |
| 1995年 | 滋賀医科大学眼科 医員 | 2007年 | 滋賀医科大学眼科 学内講師 |
| 1996年 | 近江八幡市民病院眼科 医員 | 2009年 | 滋賀医科大学眼科 講師 |
| | | | 現在に至る |

学校健診における色覚検査が平成15年度から必須ではなくなり、色覚検査を受けていない先天性色覚異常者が自身の色覚の特性を知らずに進学や就職を迎え、様々な問題が浮き彫りになっている。これを受けて、平成26年に文部科学省から、学校保健における色覚に関する調査の強化などが通知された。おそらく今後は、先天性色覚異常の診療機会が増えると思われ、色覚に関する正しい知識のもとで対応できることがますます必要になってくると考えられる。

先天赤緑色覚異常はご存知のようにX連鎖性遺伝であり、X染色体上のL錐体をコードするL遺伝子もしくはM錐体をコードするM遺伝子いずれかの欠損が原因とされている。しかし、我々が日本人先天赤緑色覚異常の視色素遺伝子の解析を行った結果、十数%に正常遺伝子型がみられることが分かった。さらなる解析により、視色素遺伝子のエキソン内のミスセンス変異やナンセンス変異、プロモーター変異が見出され、L遺伝子もしくはM遺伝子が発現していないことが考えられた。

今回は、先天赤緑色覚異常について、遺伝子を含めその病態、検査、診断、診断後の対応について述べたい。

次世代の屈折矯正手術 SMILE・Hole ICL

北里大学医学部眼科 准教授 神谷 和孝 先生



略歴

| | | | |
|-------|----------------|-------|---------------------|
| 1993年 | 神戸大学医学部医学科卒業 | 2003年 | 公立学校共済組合関東中央病院眼科部長 |
| 1996年 | 東京大学医学部眼科学教室助手 | 2006年 | 北里大学医学部眼科学専任講師 |
| 2001年 | 国立病院機構東京病院眼科医長 | 2011年 | 北里大学医学部眼科学准教授 現在に至る |

近年LASIK、PRK、有水晶体眼内レンズ(phakic IOL)に代表される屈折矯正手術は、本邦においても確実に普及しつつあります。最近では、エキシマレーザーを使用せず、フェムトセカンドレーザーだけで角膜実質の一部をレンチクルとして抜去するRefractive Lenticule Extraction (ReLEx)なるものが開発されていて、フラップを作製するFLEX(Femtosecond Lenticule Extraction)と作製しないSMILE(Small Incision Lenticule Extraction)に分類されます。特にフラップレスサージェリーであるSMILEは、単に外傷に強だけでなく、術直後の疼痛やオキュラーサーフェスへの影響も少ないことが予想され、理論的な背景からもポテンシャルが高い術式と期待されています。その一方、内眼手術としてphakic IOLがあり、固定部位により前房型(隅角支持型、虹彩支持型)と後房型が存在します。本邦で認可されているのは、現在は後房型phakic IOL (Visian ICL, STAAR Surgical社)のみですが、中でも次世代を担う貫通孔付きレンズHole ICLが特に注目されています。さて、実際にこれらの手術を受ける患者さんは、どのような術後経過をたどっていくのでしょうか?また、そのような患者さんが来院した場合、臨床医として最新の情報を提供できるでしょうか?本講演では、次世代の屈折矯正手術であるReLEx SMILEとHole ICLに焦点を当てて、それぞれの手術手技や臨床成績について紹介し、これらの最新テクノロジーが、屈折矯正手術で今後どのような位置付けとなるのか考えてみたいと思います。

視神経症としてのOCTを用いた緑内障診断

神戸大学大学院医学研究科外科学分野眼科学 講師 金森 章泰 先生



略歴

| | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1999年 | 神戸大学医学部卒業、同大学附属病院眼科研修医 | 2007年 | 神戸大学医学部附属病院 眼科助教 |
| 2004年 | 神戸大学大学院医学系研究科 卒業 | 2008年 | モンテリオール大学 眼科(病態細胞生物学) 留学 |
| 2004年 | 神戸大学医学部附属病院 眼科医員 | 2010年 | 神戸大学医学部附属病院 眼科助教 復職 |
| 2004年 | 兵庫県立尼崎病院 眼科医員 | 2014年 | 神戸大学医学部附属病院 眼科講師 |
| 2006年 | 神戸大学医学部附属病院 眼科助手 | | |

緑内障の診断にはいうまでもなく視神経乳頭変化や網膜神経線維層欠損等の構造的障害と緑内障性視野障害の存在が不可欠である。光干渉断層計(OCT)を用いることで、検眼鏡的所見を裏付けすることができ、一般的な初期緑内障の診断に苦渋することはもうないのである。しかし、OCTの緑内障診断力は実際にはどれくらいかはあまり知られていないのではないのだろうか。また、近視乳頭を伴う緑内障は初期であっても診断が困難な例も多く、OCTが一助となるが、それほどの程度の緑内障検出力があるのか、広まっていなと思われる。本講演では、われわれのデータをもとに緑内障診断におけるOCT活用の現状を実際の症例を提示しながら講演する。

また、視野障害が出現していない、いわゆる極早期緑内障(PPG)の診断にはOCTが不可欠と考えるが、OCTによるPPGの診断精度を高めるためのストラテジーを考え、どのようにOCT解析結果を判読すれば良いのかを解説する。

また、緑内障の本態は網膜神経節細胞の軸索障害であり、その細胞体の消失である。緑内障診断に眼圧値は必須ではなく、緑内障は視神経症のひとつと考えると、緑内障はいわば除外診断と考えることもできる。しかし、緑内障様の視野変化を示す視神経症はいくつか存在する。緑内障診断の際に鑑別にあげなければならない視神経症について紹介し、そのような視神経疾患の病態把握・診断にもOCTは有用であることに触れたい。

注意すべき炎症性眼疾患

横浜市立大学医学部眼科学 主任教授 水木 信久 先生



略歴

| | | | |
|--------|----------------------|---------|-------------------------------|
| 平成元年3月 | 横浜市立大学医学部卒業 | 平成11年4月 | 国際親善総合病院 眼科医長 |
| 平成2年4月 | 東海大学医学部分子生命科学専攻(兼務) | 平成13年4月 | 横浜市立大学医学部眼科学 助手 |
| 平成5年3月 | 横浜市立大学大学院医学研究科博士課程修学 | 平成14年1月 | 横浜市立大学医学部眼科学 主任教授 |
| 平成9年4月 | 横浜須賀共済病院 眼科常勤嘱託医 | 平成15年4月 | 横浜市立大学大学院医学研究科視覚器病態学 主任教授(兼務) |

ぶどう膜炎の原因は多岐にわたり、症状や所見も似たようなものも多く、鑑別診断に苦慮することも少なくありません。また、色々と精査をしてみても最終的に原因がはっきりしない原因不明のぶどう膜炎もかなり存在します。一方で、アナムネーゼ、症状、所見、検査データなどから診断が確定できるぶどう膜炎も多く、これらをしっかりと診断していくことが大切です。しかしながら、日常の診療においては、経験したことの無い症例に遭遇することも少なからずあります。このような症例では、適切な対応を取ることができず、ミゼラブルな結果を招いてしまうこともあります。そこで、本講演では、最近大学に紹介されました注意すべき炎症性眼疾患に関しまして、症例を提示しながら、より日常の診察に則した形で、疾患からではなく、所見から診断に至るプロセスや鑑別診断のポイントを分かりやすくお話し、先生方と検討していきたいと存じます。先生方の明日からの日常診療の一助になれば幸いです。

眼科疾患の疫学、そして、これからの眼科予防医学

山形大学大学院医学系研究科・公衆衛生学講座 准教授 川崎 良 先生



略歴

| | | | |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------|-----------|---------------------------------------------|
| 1997-2008 | 山形大学医学部眼科学講座助手 | 2008-2012 | 豪Royal Victorian Eye and Ear Hospital網膜フェロー |
| 2006-2007 | 米国ジョンス・ホプキンス大学ウィルマー眼研究所 Dana Center for Preventive Ophthalmology客員研究員 | 2013-2015 | 山形大学大学院医学系研究科・公衆衛生学講座・助教 |
| 2007-2012 | 豪メルボルン大学 Centre for Eye Research Australia研究員フェロー | 2015-現在 | 山形大学大学院医学系研究科・公衆衛生学講座・准教授 |

我が国の人口構造は高齢化が進み、その勢いは次の10年、20年と続くことが予想されています。成人の失明原因の多くは加齢と共に増える緑内障、加齢黄斑変性、また、今や国民病と言える高血圧や糖尿病網膜症に伴う合併症が占めています。視覚障害は健康寿命の維持、延伸に不可欠な重要な要素です。

本講演では、成人の失明原因の上位を占める眼疾患の疫学を概説し、それに対してどのような予防医学のアプローチが可能か一緒に考える機会を提供できればと考えています。検診を用いた眼疾患の早期発見、複数の危険因子が複雑に作用する疾患発症を予測するモデル化、また、ハイリスク者に対する介入、集団に対する介入、様々な視点から眼科の予防医学を考えたいと思います。

加齢黄斑変性に関する新知見と治療への展開

東京女子医科大学眼科 准講師 古泉 英貴 先生



略歴

| | | | |
|-------|-------------------------------------------|-------|--------------|
| 1998年 | 京都府立医科大学卒業、同眼科研修医 | 2012年 | 東京女子医科大学眼科助教 |
| 2006年 | Manhattan Eye, Ear and Throat Hospital研究員 | 2013年 | 同 准講師 |
| 2009年 | 京都府立医科大学眼科助教 | | 現在に至る |

加齢黄斑変性の診療は抗VEGF薬の登場により視力維持から視力改善を目指す時代へと進化した。現在複数の抗VEGF薬が使用可能となり、PDTも含めたベストマネジメントが模索されている。演者はOCTや眼底自発蛍光撮影などの非侵襲的眼底イメージングから得られた知見を如何に最適治療に展開するか、また治療を通じて得られた知見から如何に病態を理解していくかを考えながら、日々診療に取り組んでいる。本講演では演者が長年取り組んできた加齢黄斑変性の病態と治療に関する知見のサマライズと今後の展望につきお話をさせて頂く予定である。